



川苔作り（八木橋信吉氏撮影）

かわはく No.69

CONTENTS

開催予告：令和2年度春期企画展「海苔・川苔・のりのり！」	2
開催予告：スロープ展「水の中の植物 藻類」	3
開催報告：秋期企画展「タカ・ハヤブサ・フクロウ～荒川流域の猛禽類～」	4
開催報告：スロープ展「日本のワシタカ・フクロウ」	5
開催報告：荒川ゼミナール 「都幾川を歩く1～令和元年東日本台風の被災地を歩く～」	6
開催報告：かわはく研究室～川・自然・歴史～「土と砂のちがいとは」	6
新型コロナウィルス感染拡大と戦う 川の博物館の新たな挑戦	7
イベント情報コーナー 12・1・2・3月	8



開催予告

令和2年度春期企画展 のりかわのり 「海苔・川苔・のりのり！」

開催期間：令和3年1月23日(土)～4月4日(日)

会場：本館第2展示室

荒川が注ぎ込む東京湾は、かつては日本一の海苔漁場でした。おにぎりに使われる海苔は、日本人の誰もが知る食材ですが、原材料である“ノリ”がどんな生き物なのか、どのようにして養殖されて板海苔になるのかはあまり知られていません。

一方、川苔（カワノリ）は川の上流で生育し、海の海苔とは全く別の生き物です。生育場所が限られ、絶滅危惧種にも指定されています。しかし、海苔よりも早く板状の製品となり、献上もされていた歴史があります。

川の始まりと終わりでそれぞれ育つ“ノリ”。人とのりとの関わりから、生き物としてのノリとその生育環境について紹介します。

■海苔

○東京湾の海苔

板海苔の始まりは、江戸で作られ売られた「浅草海苔」で、將軍家へも献上されました。昭和前期まで、東京湾内湾はノリ養殖が盛んでした。しかし、昭和37年に東京湾の改修のために、当時の一大産地大森（東京都大田区）を含む東京湾内湾地域は漁業権を手放し、現在では浅草海苔の名を知る人も少なくなっています。

海苔は、遠浅で潮の干満がある海で、川の水が流れ込む場所に育ちます。時代と川の改修とともに東京湾の主要な海苔漁場は移動しました。隅田川・多摩川・江戸川の栄養を糧に、盛んに養殖された東京湾内湾の海苔について紹介します。



東京府海苔採場実測図「浅草海苔」より
(川越市立中央図書館 所蔵)

○生き物としてのノリ

板海苔は、紅藻類ウシケノリ科に属するアマノリの仲間を原料に作られます。アマノリの仲間は紅藻類の名通り、赤い色素をもつのが特徴の1つです。薄く平たい体ですが、板海苔からはその形を知ることはかないません。食用とされるスサビノリやアサクサノリを中心に、アマノリの仲間の標本6点を展示し、生き物としてのノリの姿を紹介します。また、養殖品種である大型のナラワスサビノリとオオバアサクサノリの標本も展示します。



スサビノリ
(千葉県立中央博物館分館海の博物館 提供)

○ノリの養殖と海苔作り

海苔の旬は、冬から春にかけて、まさに今海苔が盛んに採取され、作られています。養殖方法は、長年の経験と研究から、ノリの一生を知ることで、生み出されてきた方法です。昭和初期まで東京湾内湾で行われていた養殖方法を中心に、養殖し、抄いて板海苔になるまでの過程を、当時の養殖道具や画像を展示して紹介します。また、現代の養殖の様子も、画像を通して紹介します。



海苔採り (大田区立郷土博物館 提供)



■川苔（かわのり）

○溪流に育つ川苔

渓流の限られた場所に育つ川苔。海苔より早い時期から板状の製品となり、食べられていたと考えられています。有名な産地では、採取される川の名前を冠して、大谷川苔（栃木県）、芝川苔（静岡県）などと呼ばれています。残念ながら荒川の川苔は、全国的に知られなかつたため荒川の名はつきませんでした。しかし、上流域では昔から各家庭で採って楽しまれており、大正時代に天皇へ献上された記録も見つかりました。

その一方で、カワノリは限られた場所に生育し、河川周辺の環境変化の影響を受けるため、埼玉県と環境省によって絶滅危惧種に指定されています。今年は、昨年の台風によって川底が削られたり土砂を被ったりしたことから、例年より生育量が少ないという声が聞かれました。

○荒川水系の川苔

荒川上流域では、各家庭で川苔を採取し板状に抄いて食べられていました。抄く製法や道具は、それぞれ家独自の方法があります。道具と画像を展示し、荒川での川苔作りを紹介します。

表紙の写真は、秩父市大滝大血川沿いにお住まいだった馬場三郎次さん（故人）の川苔作りの様子です（昭和60年撮影）。現在では息子さんが作り続けています。

○カワノリの一生

川苔は、生物名もカワノリです。薄く平たい体は海苔と似ていますが、緑色の藻類です。冬が旬の海苔に対して、カワノリの旬は夏から秋です。5月頃から採ればじめ、10月頃の台風の時期に減少します。11月中旬から再度採れて12月を過ぎたあたりに減少して見えなくなります。荒川産の標本とともに紹介します。



荒川産カワノリの標本



川苔作りの様子（小鹿野町両神小森）

（研究交流部 三瓶ゆりか）

開催予告

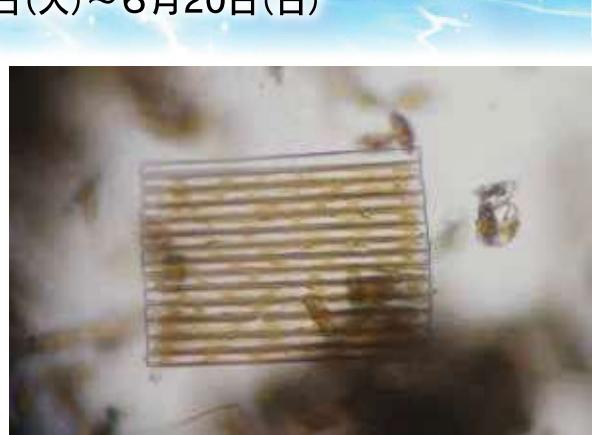
スロープ展「水の中の植物 藻類」^{そうるい}

開催期間：令和3年2月9日(火)～6月20日(日)

水の中に生えた、茶色くぬるぬるしたものや緑色で糸状のもの。これらは、一般に「も」や「こけ」と呼ばれていますが、生物学的には「藻類（そうるい）」といいます。陸上に生える草や木などの植物よりも原始的な生き物ですが、草木と同じように光合成によって光を利用して生きています。

時に汚れとして疎まれる存在ですが、その姿は陸上の植物とは異なり、ちょっと不思議でおもしろい形をしています。

顕微鏡で拡大すると見えてくる、様々な藻類の姿を写真で紹介します。



ケイソウ（Synedra 属）

（研究交流部 三瓶ゆりか）



開催報告

秋期企画展 「タカ・ハヤブサ・フクロウ～荒川流域の猛禽類～」



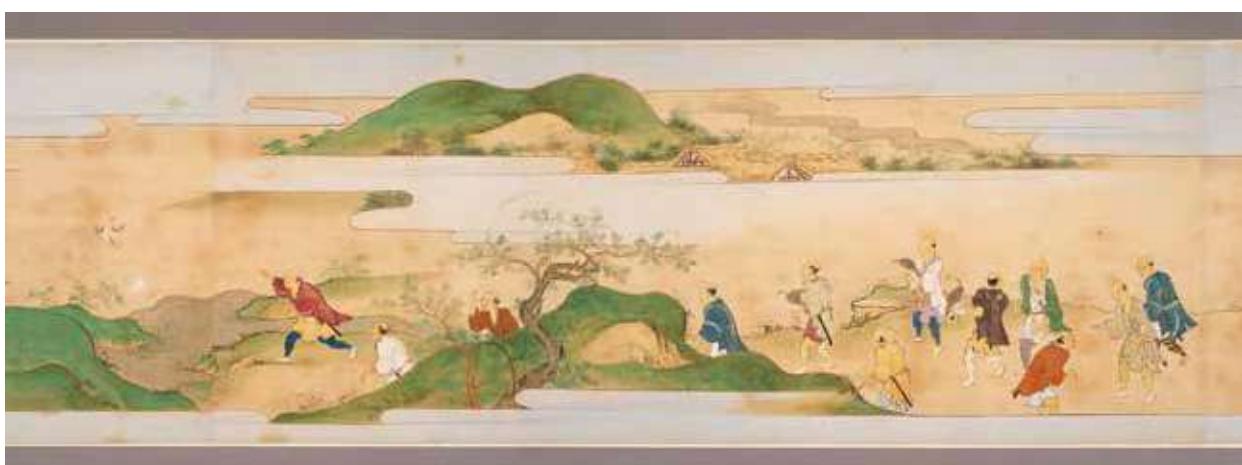
ノスリ（タカ科）

令和2年9月26日より同年11月23日まで秋期企画展「タカ・ハヤブサ・フクロウ～荒川流域の猛禽類～」を開催しました。

タカ、ワシ、フクロウ、ハヤブサなどの猛禽類は、獲物を狩る鳥類として野性味あふれる姿や、大空を舞う雄大さなどで人々を魅了します。川の博物館の周辺でも生息するオオタカは人里に近い身近な環境でも繁殖するなど、決して遠い存在ではありません。本展示では荒川流域で見られる猛禽類を紹介しました。また、人と猛禽類の関わり合いとして、愛らしい姿や表情で古くから親しまれているフクロウや、江戸期に県内の平野部でおこなわれていた鷹狩りなどについても紹介しました。

荒川流域には27種の猛禽類が記録されています（まれに飛来する種を含む）。秩父山地をはじめとする上流部は大型のクマタカが生息し、王者として君臨しています。丘陵地が広がる中流域ではオオタカをはじめに様々な種の猛禽類がみられます。平野が広がる下流域では都市環境にも適応したハヤブサやチョウゲンボウなどがみられます。

展示資料は、その中でも代表的なクマタカをはじめ22種は剥製標本を紹介しました。翼を広げた大きなクマタカの迫力ある姿、クマタカと小さなコノハズクなどとの大きさの対比は好評をいただきました。



大名鷹狩絵巻（部分）：当館蔵



クマタカ（タカ科）

猛禽類は獲物を狩る鳥類ですが、獲物も大きな哺乳類のノウサギから、小さなセミなど昆虫類と多種多様です。それらは剥製標本や乾燥標本などで紹介しました。ノウサギやヤマドリなど地上の生きものを上空から狙うクマタカ、飛翔しているハトやスズメなど鳥類を直接捕らえるオオタカやハヤブサ、夜間に活動するネズミを捕らえるフクロウと例を挙げれば切りがありません。

人々と猛禽類は古くから関係があったと考えられます。古墳時代の遺跡では鳥類が肩に乗った男性の人物埴輪が出土され、肩の鳥類はタカやハヤブサではないかと考えられています。江戸期には鷹狩りが盛んにおこなわれ、埼玉県内の平野部は

狩り場になっていました。オオタカやハヤブサを鷹匠が飼いならし、渡りのカモなどを獲物にしていました。鷹匠の道具や鷹狩りの様子が描かれている江戸後期の絵巻物『大名鷹狩絵巻』を実物展示しました。

しかしその猛禽類も一部を除いてその数を減らしています。大規模な開発などによって環境が変化し、神経質な種は営巣をしなくなるなど、保全や人々との共生が課題になっています。

写真のご提供をはじめ多くの方にご協力をいただき、開催できましたことを感謝申し上げます。

(研究交流部 藤田宏之)

開催報告

スロープ展 「日本のワシタカ・フクロウ」

スロープ展「日本のワシタカ・フクロウ」を令和2年9月15日より令和3年2月7日まで開催しました。日本国内でみられるおもな猛禽類を紹介しました。北海道などでみられる国内最大の猛禽類のオオワシや沖縄県の八重山諸島でみられる特別天然記念物のカンムリワシなど魅力的な猛禽類を生態写真で展示しました。なお、本展示は秋期企画展「タカ・ハヤブサ・フクロウ～荒川流域の猛禽類～」のサテライト展示です。

(研究交流部 藤田宏之)



オオワシ（タカ科）



開催報告

荒川ゼミナール

「都幾川を歩く1～令和元年東日本台風の被災地を歩く～」

開催日：令和2年10月4日(日)

10月4日(日)に、荒川ゼミナール「都幾川を歩く1」として、東武東上線高坂駅周辺を歩いてきました。

この地域は、令和元年東日本台風で、都幾川・越辺川の堤防が決壊し、大きな洪水被害が生じた地域の1つです。堤防が決壊した情報は、各種報道で大きく取り上げられたこともあり、比較的多くの方に知られていることかと思いますが、被害の実態やなぜ堤防が決壊したのか、治水対策はどうなっているのか、堤防決壊地点周辺以外の被災状況等、あまり報道されていないことや、知られていないことは多々あります。もちろん実際に被害にあわれた方々の苦労は、とうてい言葉で表すことができません。

今回のウォーキングでは、まず改めて堤防のどの場所が決壊したのか、そしてなぜ決壊してしまっ

たのかということを知ってもらうことを一番に考え、またあわせて都幾川や越辺川は荒川の支流ですが、その荒川の支流の治水対策の現状や問題点を知ってもらうことを目的に見学場所を選定してみました。

参加者の方には現地を見学していただくことで改めて水害の恐さや、各種報道ではあまり知ることのできなかった点を知っていただくことができたのではないかと思います。

今年の荒川ゼミナールは昨年の台風被害を知つてももらうことをメインに、年間計画を立ててみました。今後も参加者の方が今特に知りたいこと、そして今回のような川の恐ろしさだけを知る企画だけではなく、川の魅力を現地で知ることができる企画等を引き続き考えていくべきだと思っています。

(研究交流部 羽田武朗)

開催報告

かわはく研究室～川・自然・歴史～「土と砂のちがいとは」

開催日：令和2年10月18日(日)

私たちが生きていくために欠かせない土ですが、土のことをあまり知らない人が多いかもしれません。皆さんはどうですか？

まずは「土と砂のちがいって何？」のといかけから始めました。砂といくつかの土をお皿に入れて眺めたり、触ったりしながら考えました。ざらざらとした砂に対して土は「さらさらしている」「やわらかい」などの感想がありました。何かがちがう…。そこで土がどのようにできるのか、についてモノリス(土壤標本)を見ながらお話をしました。石がくずれたもの(砂)などの上に苔などが少しづつ生えてきて、さらに時間がたつとたくさんの植物が生えてきて、それらが枯れるとそれを食べる生きものたちが活動し、次第に石や砂など(無機物)と植物の枯れたもの(有機物)がまぎり合ひ、黒っぽい土が出来ていきます。このようにしてできた土は多くの植物を育む土台です。3本のモノリスは岩石の形状がまだ残るもの、土の厚み

が少し増したもの、上部に厚い腐植層と土、木の根などが見られるものでした。

さらに、土の中にはどのような生き物がみられるのか、ミミズや小さな甲虫などを肉眼で、ダニやトビムシを実体顕微鏡で観察しました。最後に土の「水を貯える」という役割を実験で確認しました。そして土と砂のちがいとは「生き物を育む力」と結論づけました。少しでも土のこと、土の大切さに気付いていただけたら嬉しいです。

(研究交流部 森圭子)





新型コロナウイルス感染拡大と戦う 川の博物館の新たな挑戦

昨年末より新型コロナウイルス感染が世界レベルで拡大し、年明けからその波が日本にも及んできました。まさかと誰もが思った新型コロナウイルスの感染拡大の影響が始まったのです。

過去経験のないコロナウイルスの感染拡大は川の博物館を運営していくには想像を超えた多くの対策を強いられたのです。国が、地方自治体が、発令した緊急事態宣言のもと、多くの感染拡大防止ガイドラインによる規制が求められました。

ついに2月29日（土）から臨時休館となり、期限も当初の3月15日（日）から一向に収束しない感染拡大により、約3ヶ月の長きに渡る休館となりました。

学校が休みとなり、企業人の在宅勤務（テレワーク）や飲食店の多くが休業し、イベントの中止等世の中の機能の多くが停止してしまいました。

川の博物館は昨年10月の台風19号で被災し大きな被害を受け、施設の多くが復旧途上にありました。それに加えてコロナの影響で例年賑わうGW期間も休館し、ようやく5月26日（火）に

部分再開しましたが、感染拡大防止の規制や台風19号による被災で利用できない施設が多く、例年の来館者数は期待できませんでした。

台風による復旧予算が捻出され、物流の要となる駐車場の一部整備、わくわくランドの遊具、総合案内所、仮設電源による設備や制御の再開などが進んでいます。そこへコロナの影響が追い打ちをかけたのです。

その後、夏場の賑わいとなるわくわくランドの復旧工事が完了し、8月1日（土）から再開できました。新型コロナウイルス感染拡大防止の厳しいガイドラインを遵守しながらの開館となりましたが、短縮された学校の夏休みに何とか間に合い、久々に子供たちの笑顔に会えました。

コロナの収束予測が立たない中、感染拡大防止のガイドラインを遵守しながらの開館ではありますが、より多くの来館者をお迎えし、魅力ある川の博物館の運営をスタッフ全員で進めて参ります。

（統括マネージャー 二川真一郎）



入館時におけるスタッフの対応



消毒液の設置



館内における感染症対策の一例



座席数を減らしたアドベンチャーシアター

かわはくで学ぼう!!

イベント情報コーナー

2020

12月

9/15/火～2021/2/7/日

スロープ展「日本のワシタカ・フクロウ」

12/12/土～12/27/日

連携展「荒川国画コンクール」

12/4/金～2021/1/10/日

かわはく冬のイルミネーション

5/土

かわはく体験教室「廻づくり教室」

時間：13:30～15:30

定員：16名

内容：正月前に、竹ひごと和紙を使って角廻を作ります。

6/日

かわはくであそぼう・まなぼう「土でアート作品づくり」

時間：13:30～15:30

内容：12月5日は「世界土壤デー」。色の異なる土を使って作品を作つてみます。

13/日

かわはく研究室「しらすの中のチリモン探し」

時間：13:30～15:30

内容：しらす（ちりめんじやこ）に混ざっているエビやイカなどを探し、観察します。

19/土

かわはく体験教室「小さな小さな微小貝をさがそう！」

時間：13:30～15:30

定員：20名

内容：砂に混ざっている1cm以下の小さな貝を探します。貝以外の生き物も見つかるかも。お持ち帰りもできます。

27/日

モノづくりを楽しみながら学ぶ「ミニ門松づくり」

時間：①11:00～②11:00～

③14:00～（各回60分程度）

定員：各回10名

内容：お部屋に飾れる高さ30cm程のミニ門松を職人さんに教わりながら作ります。自分で作った水引の飾りと、ミニ壇も付きます。これでお正月の準備はばっちりです。

2月

2/9/火～6/20/日

スロープ展「水の中の植物 藻類」

6/土

かわはく体験教室「荒川の石図鑑づくり」

時間：13:30～15:30

定員：20名

内容：荒川のかわせみ河原で石を集めて、石の実物標本図鑑を作ります。

7/日

季節を楽しむ「お雛飾りつくり」

時間：11:00～15:00

内容：うさぎちゃんのお雛飾りをソフト粘土で作りましょう。

11/木祝

海苔づくり体験

時間：①10:00～12:00 ②14:00～16:00

定員：各15名

内容：ノリを刻んで抄いて、板海苔づくりに挑戦します。

14/日

展示解説

時間：①11:30～②13:30～（各回30分程度）

内容：企画展の展示解説をします。

21/日

かわはく研究室「土のすきまを調べよう」

時間：13:30～15:30

内容：土の中のすきまを調べる簡単な実験を行い、ふかふかな土の秘密をさぐります。

23/火祝

ノリの標本をつくろう！

時間：13:30～15:00

定員：15名

内容：生のノリを観察して、標本をつくります。

2021

1月

1/23/土～4/4/日

春期企画展「海苔・川苔・のりのり！」

5/火

季節を楽しむ「干支飾りつくり～今年の福はウシに乗ってやってくる～」

時間：10:00～14:00

定員：随時4名程度受付

内容：2021年の干支“ウシ”的置物を羊毛フェルトで作りましょう。

6/水

かわはくであそぼう・まなぼう「お正月あそび」

時間：①10:00～12:00 ②13:00～15:00

内容：お正月の伝統あそびを体験できるコーナーを作ります。

16/土

かわはく体験教室「土を使って染めてみよう！」

時間：13:30～15:30

定員：15名

内容：ニセアカシアの花を使い、土を媒染剤にして布を染めます。赤い土をすりこんで染める方法も試します。

17/日

かわはく研究室「水車のエネルギー」

時間：13:30～15:30

内容：水車の動力の伝わり方について、模型を使って説明します。

24/日

展示解説

時間：①11:30～②13:30～（各回30分程度）

内容：企画展の展示解説をします。

31/日

かわはくであそぼう・まなぼう「かわはくでまめまき」

時間：①11:00～②14:00～

内容：ワークショップでマスをつくり、まめまきをします。

*①②は豆まきの時間です。

3月

7/日

展示解説

時間：①11:30～②13:30～（各回30分程度）

内容：企画展の展示解説をします。

21/日

荒川ゼミナールⅠ 川を知るウォーキング

「新河岸川を歩く2」

時間：10:00～16:00（予定）

定員：20名

内容：荒川の支流、新河岸川を歩く企画の第2弾として、新河岸川の流れがおかしな地点を見に行きます。

21/日

かわはく研究室「水の中の“も”ってなんだ？」

時間：13:30～15:30

内容：水の中の「も」や「こけ」を顕微鏡で観察します。

27/土

かわはく体験教室「カラフル海藻でしおりを作ろう」

時間：13:30～15:30

定員：20名

内容：海藻でしおりを作ります。

28/日

かわはくであそぼう・まなぼう「科学あそび」

時間：13:30～15:30

内容：液体窒素を使った実験などを行います。

ホームページでも紹介しています！

<https://www.river-museum.jp>

【お願い】①イベントは諸事情により変更になることもあります。ご了承下さい。②印のついた行事は事前申込みが必要です。費用に「保険料」が含まれるイベントの申込締切日は、各イベントの開催日の前日（午前中）までです。③定員になり次第締め切ります。

■編集・発行

埼玉県立の博物館

〒369-1217 埼玉県大里郡寄居町大字小園39番地

TEL／048-581-8739(研究交流部) FAX／048-581-7332

ホームページのフォームからお問い合わせいただけます。



2020年11月28日発行